

人生活

一番多いのは何か、答えて曰く「人である。」
一番少いのは何か、答えて曰く「人である。」

人が多いとは何を意味するか。ただ肉体的に存在する人のことである。
人が少いとは何を意味するか。深く精神的に生活せる人のことである。

存在と生活、我らに課せられたたる永遠の問題である。生活なき所、そこに人生はあり得ない。

徹底せる生活者、もしこれを願はざる人がありとするならば、彼は生きて価値なき人である。人が動物と異なる以上、単なる生存に満足する者は一人もないはずである。高僧の深山に思いをねる。哲学者の書齋に瞑想にふける。彼らは一体何を思い、何を考えしぞ。深き人生生活の徹底のためではなかつたか。

自覚的生活

一、自覚

真の生活には自覚がある。自覚なくしても生存は出来る。しかし自覚なくしては絶対に生活はない。自覚なき者は習慣にひきずられる。他人の言葉や、他律的な命令のみひきづられて、形から形の上を上すべりして、自分のほんとうの道を考えない。何時も愚痴や不平に囚えられるか、安価な妥協に腰をおろしていわゆる「白紙の巻物」のまゝで五十年がおわつてしまふ。何物を見ても、誰を見ても、驚きの心を持たない。自ら進んで道を求めようともせず、自分の現状について大した悩みも持たない。西洋の哲人は「人間は弱い葦だ。しかし考える葦だ。」と言つたけれど、深く考えてみることをしない。人間をただ、やり手と、やり手でない人にとに仕別して、いわゆる小才を使つてやり手になろうとする位が関の山である。こうして老いること、なまけること、金をためたいと思うこと、それ位が全部になる。これ等は弱き善人で、目覚めざる大部分の人である。

更に進んで墮落すると、悪友に誘惑されたり、金持であることがたたりたりして放蕩者になり、やがては、罪惡の淵に沈みはて、世間に害毒を流す。法律の綱渡りを知つて、良民の膏血をしぼり、不正の金を集めて、浮薄なる榮華に世間をけがし、時に代議士等になりすましては、一国の政治を私利のために利用し、国家の前途に拭うことの出来ぬ禍害を流す。

時に、賢者善人を迫害し、攻撃して、私利のために恥を感じず、徒党を組んで暗中にはびこる。因果を信せず、大法に随わず、真理に反逆して、そのゆく所世間を暗黒にする。大地の上には、牢獄があり、裁判所があり、警察があり、遊廓があり、軍隊がある。これらなくしては始末におへぬ人間の部類である。単なる本能的存在にすぎぬ。

存在を超えて生活へ！そこに自覚の天地がある。生存とは肉の世界である。内の生活をはなれては一切がない。自覚は決して肉の世界を棄てるのではない。現実を如何に光あらしめるか。価値あらしめるか。自覚はそのまゝ生活である。

二、時間

時は人の力を借らずして昨日が今日に、今日が明日に変わってゆく。時の流れに随って流されてゆく。聖者のためにも一日は二十四時間である。遊蕩鬼のためにも一日は二十四時間である。

徹底せる生活をせんとする者は、時間のいたずらに過ぎゆくを悲しむ。

あすありと思う心のあだ桜 夜半にあらしの吹かぬものかは

講演また講演、二月の如きは一日休みがあつただけ、その間に読書もする。旅行もする。更に光明と聖光の二種の雑誌を書く。いくらあつても時間が足らぬ。

暇のある人たちが、呑気な気分で訪問してくれる。何でもない話を半日も聞かされる。金をとられたよりも辛い。金は又得られる。しかし去つた時間は永遠にかえらぬ。

本部を訪問する人がある。見れば台所で働いている。あるいは製本を手伝つていて、食後の一時間、あるいは頭の疲れた時一緒に語る。時間に対する考えのある方である。

「よくまあ先生出来ますこと。」

出来るのではない。するのである。時間に使われてはならぬ。時間を使うのである。礼拝の十分間、それは大変に長い。雑談の一時間それは大変に短い。楽隠居の老人なれば日を短くする工夫のために時間つぶしの娯楽もしい。短かき生命を感じる生活者には、時は金以上である。

三、物質

時は縦に流れ、物質は横にひろがる。時間と空間の無限、そこに宇宙があり、大自然がある。

物に対する自覚、それは極めて広汎な問題である。人類の心血はこの問題に注がれたと言つてもいい。

肉を持つ以上、パンなくしては生きられぬ。衣食住は物質の上に立たないでは成り立たぬ。人類の一人でもが、働いてもく／＼食えぬ社会があるならば、それは社会組織の欠陥である。いかなる努力を払つても改革されねばならぬ。しかし我らは社会組織の完成する日をただ徒手して待つていいのだろうか。否、社会の組織が改造されただけで、我らは幸福であり得ようか。

物質に対する正しい見方、積尊はそれに答えて「無所得に任する」と言われた。無所得に任するとはいかなる意義であろうか。

いつたい世の中に我がものというものがあろうか。我がものとは一つもないのではないか。ただ「これは我がものなり。」という所有觀念に生きているのではないか。所有觀念の満足である。決して所有さるべきものではなくて、借物である。

堂々たる御殿のようなお座敷の客となることがある。この時はこのお座敷が私のものである。帰る時には拂つてかえる。私は今、冬の和服を着ている。夏の衣服はどこにあるのか。今まで考えてもおらなかつた。夏が来たらこの冬服の一切をはらう。この室も、このペンも、この書物も、用のある時、借りているのである。万物たゞ、借りるのである。我が体さえ借物である。

「所有欲の開放」これが物質に対する自覚の第一である。富豪の頭から所有欲を棄てしめよ。貧しき着から所有欲を開放せよ。積尊は一切の所有欲から出でられたが故に、一切は我が有であると積尊は叫ばれた。

所有欲の開放とは決して意味なく物質をまきちらせというのではない。また一切を棄てて乞食になれというのではない。所有しつつも所有に囚われる心を棄てよというのである。

物だけではない。時には私が子供すら所有して一歩も我が袂の下を出すまいとして、それに愛の名をつけようとする。所有することは愛の真の相ではない。七人の子供がいても、それは決して親の所有ではないように、如何に巨万の富を所有していても、断じてそれはその人に固定されたものではない。

積尊の無所得の思想によく似かような思想がある。「無産」ということがもし、人間の自覚なしに形の上だけ実行されたとしても、それは人間の幸福を増進するやり方ではない。

積尊は物を所有しなかつた。しかし単なる無所有ではない。何物をも所有しなかつたに、何ものをも尊んだ、蓮如上人は召物など足にあたれば、それをおしただかれた。又、廊下に紙切れのおちておるのを見て、仏法領のものをあだにするか、と仰せられた。一本の菜、一粒の飯米、一ぱいの水、その中にももの価値と御恩とを忘れぬのが仏法の無産思想であつた。物に対する自覚の第二はこれである。

汽車の中の弁当の食べ方、中をほり食いして平気で棄てる人、しかもそうしないのを恥の如く考えるかのように。

ある地方では皿に一滴、一物もなくなるまで食うことを卑しいという。何らの上品ぞや。我らはこうした愚さから出たい。

恩を知り、物の価値を知る者には濫費はない。世の富める者が、我が榮華のためには数十万金を費して恥じず、他のためにはかることを知らぬは、恩に裏づけられた無産思想を知らぬからである。

金を湯水の如く使つて平然たるもの、時にこれを英雄の如く考え、大人物豪傑の如く考えた時代がある。何たる愚ぞ。万金にあかした一夕の豪遊、それがいつたい人生に何を生んだか。

青年の前途を卜するため、彼らに百円を渡してみる。その使い方、人格の方向がわかる。

女と酒とに一年の汗脂をたゞの一夕に使ってしまふ青年がある。

カフェー女給に金を与えてその笑顔を買つて喜ぶものがある。

金がもし仏の手に握られたら、世間を生かす方便となり、悪魔の手に握られたら、人と我とを傷け害う殺人剣となる。

かるが故に第三の覚悟は「儉」である。儉とは使うことである。有益に使うことである。我と他人とを真に生かすために使うことである。

平気で虚栄のためにお金を使う女を妻にした者は一生浮ばれない。時には、高位高官が失脚したり富豪が破産したりする。

物品の整理を忘れた家庭ではおちつけない。机の上が何時見てもきちんとしていない人であるならば、私は何日でも重要な位置に推挙する。我々が人間である限り、物質なくしては生きられぬ。もし金を得ることをもつて卑しとする思想があるならば、我ら凡人には用事はない。

しかしながら、我々が金を得るためには正しい労働によらねばならぬ。もちろん精神的労働も含まれねばならぬ。自ら働かずして、なるべく多くの収入を得ようとする考え、いわゆる「ぬれ手に粟のつかみどり」の考えが如何に日本を危地に陥れたか。

父祖伝来の財産によつて何等の勤労なくして懐手して食う者、人と人との中間に立つて秘密のしぼり取りによつて食う者、これ等は恥ずべき人である。

4

生活即向上

生活するとは向上することである。生活するとは創造することである。向上するとは、不断に深く広く創造することである。伸びることである。

もし伸びない向上しない人生があるならばそれは人間の生活ではなくて、人間の生存である。

動物は十年一日の如く向上も進歩もない。向上なき者は墮落する。

画家に創造がなくなれば、彼は型の絵描きになる。宗教家に創造がなくなれば、彼は売談屋になる。努力のない所に向上も創造もない。

村会議員との交渉がうまくなり、村の碁会で友が出来はじめた頃、凡俗はよい先生という。しかし研究よりは凡俗との円満なる交際が嬉しうなり、書齋に入つても一冊の新刊の書物も見あたらなくなる。

ちつとも伸びなくなつた大学教授、生きた世間は近い内に棄てる。

大学教育を受けられぬことをなげく青年はある。しかし寸陰を惜しんで読書する青年がない。

月給の上らぬことを、不平の種にする人はある。しかし何等の改善も努力もはらわれないことを自覚して悲しむ青年がない。

水も動かねば腐敗する。向上しない者は枯れてゆく。

向上を望みつつも、努力することをいとう者が、人の世界を模倣する。筆法だけ真似た絵画や彫刻、凡俗が美しいと見ている時、識者は死の宣言を与えらる。創造は活きた芽であり、模倣は造花である。

自己から生えぬいたものには香があり、生命があり、永続性がある。まねた者には生命がなくて、一時である。

真の創造は、信念と、努力から生れる。

わずかにでも秀でた人、近所によつて見ていると、涙ににじむ努力の貢がある。

真の創造はただ努力からのみ生えぬく。

創造の天地には、必ず独自の個性のひらめきがある。

涙の求道なくして生れた高僧はいない。血の奮闘なくして生れた英雄はいない。

凡人は僥倖をたのんで今日を徒費し、明日の夢を見て、今日の怠惰を言い訳する。

どれだけのびたか、ただ現在から現在にのびてゆく。

無限の過去を背負い、永遠をはらんだ現在の一念に、大地をきつて出た若芽の先端のような力がこもる。

深い哲人の講演が我ら凡俗には一分の価値もなく聞えることがあり、お喋り講談式の大風呂敷に、百千の民衆が一人残らず涙することがある。

前者決して不成功ではない。後者かえつて彼自身を墮落せしむる者。

高くにらめ！ 山の頂は高い。向上なくして人生はない。

生活即幸福

一、趣味

草花を造つて喜ぶ人がある。

茶の湯に一日の苦を忘れる人がある。

日曜が来ると猟銃を肩に出かける人がある。

暇さえあれば読書する人がある。

夏が来れば登山する人がある。

肥馬にまたがって山野を馳駆する人がある。

誰にでも趣味がある。

夏の夕、蚊やりたく人の側に夕顔が咲く。

深い人生がこゝにある。

楽しむがよい。求めるがよい。

人生生活は断じて無味乾燥な荒れた所にはない。

夕食後の三十分静かに蓄音機の側に集つて名曲に耳をかたむける。

官庁から帰つて植木鉢に水をやる。

そこに人生の全体を生かす、うるほいがあり、香氣がある。

生活とは断じて木仏金仏の如く、かたまることではない。

生活者は、楽しむ人、たしなむ人である。

しかし私はたづねる。あなたの趣味は何であるかを。

日本は仏教国である。仏教は無益の殺生を禁じた。キリスト教では一切の動物は動ける野菜であるかも知れぬ。しかし一切の議論をぬいて、他の生命を犠牲にしなれば、楽しめぬというような趣味が健全であろうか。傷ついた鳥が手に入った時の快感と一生命が失われてゆく大きな悲しみとどちらが重かろう。

バクチ、女郎買い、それだけ聞いたゞけで、あとは何事を聞かないでもいゝ。その人がわかる。

映画もよかろう。骨董もよかろう。謡曲も、三味線も、囲碁もよかろう。しかし決して趣味に淫してはならない。徹夜して囲碁にふけり、勉強を忘れて、小説におぼれ家業を棄て、酒樓にいつづける、これらは全て趣味におぼれた者である。趣味におぼれぬことは修養の至れる者である。

真の生活者は、日々の生活そのものが趣味である。職業に没頭することが唯一の趣味である時、生活は幸福と一致する。

ああ、健全なる幸福、それは我が生活がそのまま趣味化した所に生れる。

二、慰安

人間は機械ではない。人間の体は鋼鉄ではない。使った次には安息を要する。何らの安息も慰安も与えない軍隊教育があるならば、人間性を忘れた教育である。人間性を忘れられた所に人間の生活はない。

職工に慰安をさせよ。兵卒に慰安を与えよ。看護婦に慰安を与えよ。家庭に慰安を与えよ。大哲スピノーザすら蜘蛛を集めて戯れさせて僅かに慰安を得た。

如何にして慰安を得させるかを考えない、長と名のつき、主人と名のつく人があるならば、彼は人血を吸う悪魔か、愛情を有せない鬼か、あるいは人生を知らない愚者である。

慰安のない所に努力は続かぬ。慰安のない所に能率は上らぬ。農村にもつとく慰安がある。工場という工場にその設備がある。我らは働くが故に慰安を求める。しかし慰安は決して怠惰ではない。一日中汗を流した者にだけ、夕べの沐浴に無限の楽しみを感じ、夕食後の散歩に幸福を感じる。

三、享楽

人生を楽しむこと、真に地上を楽しむこと、それは決して生活にそむきはしない。積尊が人生は苦なりと言ったのも、やがては、高められた真の大楽を与えんがためであった。

鳥は歌い、花は咲きほこる。楽しむのが何で悪い。楽しみのない世界に笑いはない。真の楽はどこにある。永遠に亡びない喜悅はどこにある。それは決して、争闘の中にない。遊惰の中にない。無智の中にない。

真の生活はよろこびと一致する。真の生活は、道の中に存在する。故に真のよろこびは道の中にだけある。働け、働け。働くことの中によろこびがある。愛せよ。真愛の中によろこびがある。正しい智慧を培へ、正しき道を歩め、そこに真のよろこびがある。信仰に生きよ。信念の中によろこびがある。形の上が一切やぶれてし

まった日にも、創造の大道を歩む者にはよろこびがある。世間の一切人が迫害や、攻撃や非難の刃を向ける日にも、思いを天空にはせ得るよろこびがある。

一本の葉が青々と育つ、育てた人も育つたのだ。そこによるこびがある。物的なよろこびは永遠でない。騒いだ後にはさびしきが来る。

生活をそのまゝ、よろこべる人は幸である。真の生活は真の幸福と一致する。自覚をはなれて生活はない。自覚ある生活とは断えず創造することであり、向上することである。人生の真の幸福がこゝにある。

敢て他人の身の上を羨むに足らず、敢て他人の生活形式を真似るに及ばず。健実に今日一步をふみしめて、汝自身の道を歩む。

自覚と、向上と、幸福とを化して一にせる生活が汝の上に人生の意義を与える。

百姓にて結構なり、下女にて結構、教師にて可。

憶え。汝が汝自身の道を自覚して、とらわれの小我をひき破つて、現実のただ中に没入する時、汝は天地の主位に立つ生活者ではないか。

卑下すべからず、高慢なるべからず、尊重なる哉、尊重なる哉。汝の信念の尖端に輝く一念のひらめき、汝の道を生きる力は汝の生命の奥底に動く。

人多くして人少し。

人となれ人、人となせ人。

真劍

三尺の秋水、氷のようにさえた大業物をひきぬいて、武士と武士とが、互ににらみあっている。びたとつけた青眼のかまえ、どちらも容易に動かない。じりじりとわずかに退く方は、額に玉の汗を流している。もう気合によつて敗けている。あせり気味が見える。怒気があらはれた。平和がなくなる。はつと見る間に、飛びこんで打つてかゝる。しかしその太刀先は乱れている。

一方は悠々としておちついていて、受けた剣を払つたと見るその刹那、彼は電光の如く動いたと思う間に、もう敵はのどをつかれて倒れている。

真劍勝負！ 剣が勝つのか。人が勝つのか。もちろん剣が本物でなくてはならぬ。しかし剣を使う者は人である。人が人に勝つのである。

木剣で稽古する時にはどうでもよい。わずかな五分間に、幾十回、打つたり、打たれたりすることも出来る。遊戯の時にはどうでもすむ。

真劍の斬合いなつた時には、借物も間にあわぬ。評判も間にあわぬ。人の上に生きた法と、力のみが自然に、必然に動く。

自信。

敵と向かいあうた時、相手のために一分でも気をのまれる。もうその勝負はきまつている。

自信のない者が勝つたことがない。勝つ最有力な根底は自信である。

自ら信ずること、確かである時、何人も英雄であり、偉人である。

自ら信ずる心のない時、水鳥の羽音さへ、敵の大軍と見て逃走する。

自信なき者は幽霊である。

人生は真劍である。本気でしなかつたことでも、その結果が来た時には、血の涙で刈らねばならぬことがある。真劍と真劍とで向かう心、そう思った時、いい加減な生活は出来なくなる。今日一日を真劍に生きる。明日に夢を描いて、今日一日を空費する、そこに凡人の一生がある。

未熟者は手の先の技巧によつて剣を動かす。達人は全人格、これ剣である。悠々としてせまらず、その静かなること林の如く、動かざること眠れる者の如くである。剣の問題ではなくて腹の問題であり、人格の問題である。

口の先だけの美しい言葉、精神のこもらない形だけの作法、他人に見せるための勤勉家、こうした生活は一生すぎても何も残さぬ。

鎌を持って田畑にたつ、ペンを持って原稿紙に向かう、教鞭をとつて教壇に立つ、全て剣を持って立つ道場である。真劍勝負の舞台である。

勝つか負けるか。真力だけがものを言う。

聖者という聖者、高僧という高僧には、みな金剛不壊の名号の剣があつた。利劍即是弥陀名号。

これが聖親鸞や法然の心中深く秘められた剣であつた。
大無量寿経に曰く

「法鼓をたたき、法螺を吹き、法剣を執り、法幢を建て、法雷を震ひ、法電を輝かし、法雨をそゞぎ、法施をのぶ。常に法音をもて諸の世間を覚らしむ。光明あまねく無量の仏土を照して、一切の世界六種に震動す。すべて魔界を摂して、魔の宮殿を動かす。衆魔惴怖して帰伏せざるなし。」

しかしその法剣とは、決して自損損他の剣ではなくて、自利利他の法の剣である。戦に使ふ剣は鋼鉄が体である。法の剣の体は、智慧であり慈悲であり、至誠心である。至純なる赤誠、それは仏心である。

聖者の心中に秘められた、この至誠よりはえぬく信念の真剣が、魔の宮殿にひらめけば、衆魔を降伏して退散せしめる。

よく無明の業障を断つて、心を永遠の浄域に救う。

山伏弁円は弓矢や剣をとつて、板敷山に親鸞聖人をおそい、稻田の草庵に怒の毒剣を構えておしよせた。

左右なく出であひたもう聖人には、ただ自然の念仏の声あるのみ。至心、信樂、欲生の如來のみ心はえぬきの金剛の信念、おん顔に浮ぶ微笑、春の如き柔和なるお言葉、地獄よりはえぬく、欲覺、害覺、瞋覺の無明の剣は、至誠の剣には敵すべくもなかつた。弁円は剣をすて、お弟子となる。

「山も山、道も昔に変わらねど、変りはたたる我が心かな。」

と歌つた彼の心の内に、何時しか、法の剣が渡されてあつた。

龍の口の首の座に坐つて動かなかつた日蓮上人の首は、武士の剣で斬れなかつた。

心の扉をとぎせば、悪魔が立てこもる。

その心の扉を開くかぎは何か、それはただ、温かき慈愛である。

朝鮮より送つた虎の前に、柳生但島守は、鉄扇を持つて立つた。虎はおそれて逆毛を立て、うなり、但島守もかたくなつて相むかう、武は武だけれどそこには真の平和はない。沢庵禅師は笑顔のまゝで虎に近より、愛児に対するように、頭をなで、やれば、虎は静かに首をたれて静かに平和にうづくまる。

平和とは何ぞ！ 力とは何ぞ！

真剣なれ……それは決して堅くなることを意味しない。

達人の域を思いつゝ、我らは我らをかえりみる。

汝自身を忘れて他をのみ責める心。その心やがて汝を傷つける毒剣がある。

み法の剣、至誠の刃……真剣なれとはいつたい何を意味する。